

＊撮影にご協力をいただく中で、技術について沢山の事を教えていただきました。ここでは動画ではお伝えしきれなかったお話の一部をご紹介します＊

山田秀次さん（手描き友禅職人）



親子3代にわたって手描き友禅の「色挿し」と呼ばれる染色の工程を手がけてこられた山田秀次さん。ご自宅で作業をされているところにお邪魔しました。

手元に用意しておられる染料の色数は15色ほど。その中でもよく使われるのは7～8色だそうです。それらの色を混ぜ合わせて、商品に使われる色を一つ一つ作ります。今回の染色で作った色数は13色でした。染色を施した生地は、高熱の蒸気の中に入れられることで染料が生地に定着します。この「蒸し」と呼ばれる工程を経ることで、染料の発色が変化するため、「色挿し」の色は、「蒸し」の後の色を想定しながら作らなければなりません。山田さんによると、「蒸しの後は、2～3割色が明るくなる、または薄くなる」そうですが、どのように加減されておられるのか、とても不思議です。

色を表現する言葉は様々で、感じ方も人それぞれだと思いますが、千總の染織品を担っておられる方々とお話すると、「派手」「渋い」「深み」「濃い・薄い（濃度がある・ない）」といった色を形容する言葉をよく使われます。

そのことを山田さんにお尋ねすると、原色の染料以上に色を「派手」にすることはできないが、「渋い」色にするには、その色の反対色または黒を混ぜること、また、色の「派手」さには、ある程度の濃さが必要だが、濃度が低い色でも隣り合う色に白や黒を使うことで「派手」に見せることができることや「深み」のある色というものも、色単体ではなく、色の組み合わせによって「深み」があるように見せる、といった色の見え方・見せ方についてお話しくださいました。

常のお仕事においては、高級感のある色の組み合わせや効果的な色の使い方を探求される一方で、どのような色使いが若い世代に響くのか、いつも考えておられるそうです。

手描き友禅の工程の中でも、色挿しの仕事は、一つ一つの色と向き合いながら、全体でそれぞれの色がどのように見えるかを計算し尽くさなければできない職人技。研ぎ澄まされた感性が必要な技術と言えるでしょう。